

## 課題 3~5 に対する皆さんからの回答

以下は受講者の皆さんからの実際の回答の中で、担当者(長谷部)が何らかの形で「面白い」と思ったものの一部です。内容も表現も基本的に修正していません。「面白い」には実際には色々な種類があって、中には明らかな誤りや勘違いが含まれているものもあります。6月15日の授業の中で、出来る限り、それらの「面白さ」について触れていくよていです。なお、文中の下線は長谷部が施したものです(議時のコメントのためのメモ代わりであり、下線部の内容が認知言語学に必ずしも正しいというわけではありません)。

課題 3「知覚と認知」の内容を自分の経験と照らし合わせて論じて下さい。

<I さん>

今回の内容で特に図と地のことについて普段の体験や経験が浮かんできた。

わたしたちは、友達と話している時にどこからか自分の名前が聞こえてくると周囲がうるさくても意識していなくてもちゃんとそれに反応することができる。他にも、それぞれの耳から違う内容の言葉が聞こえてきても重要な方を聞き、もう一方は無視することができる。このとき聞いていた方の内容は思い出せるが、無視した方は思い出せなかったりする。

このような現象が起こるといのはとても興味深い。わたしたちは情報を取捨選択できるのである。しかも注意を向けていない内容も完全に捨ててしまうのではなく重要なことにはちゃんと反応することができる。このことは無意識にできてしまうが、本当にすごいことであると感じた。

<N くん>

授業中にとりあげられた色の識別の話ですが、たとえば、青色が薄くなれば水色と呼ばれますが、紫色薄くなれば薄紫色と呼ばれ、独立した単語では呼ばれません。(おそらく何か呼称があるのでしょうが、私は知りません。)何かなじみのあるふさわしい呼称をつけてあげたらいいと思います。このようなことを日常的に考えています。

<M くん>

私は小学生の時「ECC」に通っていたことがある。そのとき驚いたことの一つとして、動物の鳴き声が日本と外国とで異なっていたのだ。例えば、犬の鳴き声は日本では「ワンワン」であるが、アメリカでは「バウバウ」である。このように、客観的に泣き声を聞くと同じはずなのに言語や文化の違いで「認識」の仕方が異なるのである。これは授業で登場した「社会として」の認識の違いではなかろうか。

<M さん>

小学生のころ、漢字ドリルに載っている漢字をノートに10回ずつ書いてくる宿題がよく出ていた。最初の方は何も考えずにその漢字を簡単に書けるのだが、回数を増すごとに書けなくなっていく。果たしてこの漢字で合っているかと不安になるのだ。漢字ドリルと見比べても絶対合っているはずなのに、その不安は拭い切れない。むしろ不安が増していくばかりであった。ひとつの漢字がたくさん並ぶとさらにその現象は顕著になる。

このように全体で認識しているものを個別の構成要素で認識し直そうとするゲシュタルト崩壊は生活の中に常に潜んでいることがわかった。また人間は全ての事象を個別で認識しているのではなく、全体で認識しているものもあるということも授業を受けて学んだ。

<N さん>

今回の授業で、わたしが一番関心を持ったものは知覚のパターンについてである。わたしは、わたしの妹とよく似ていると言われることがよくあるが、目が似ているとしても、それはやはり似ているに過ぎず、間違えて声をかけられることはない。同じように知人の双子の人は、一見「同じ顔」に見えるが、目の下のほくろや表情の違いで、わたしはその知人らを間違えて認識することはない。何故なら、ほくろもその人としてわたしが認識しているからだだろう。

わたしはギターを趣味で弾くことがあるのだが、「ド」や「ミ」や「ラ」など個々の音では特徴がなくても「ドミラ」を一度に鳴らすと、少し物寂しい印象を受けるようになる。当たり前のことだと、これまであまり気にはしていなかったが今回の授業で、新たに疑問を持つことができた。

<M さん>

今回の講義の「2.2.2 図と地」に出てきた「カクテルパーティ現象」という言葉についてです。「直接話をしている相手の言うことが埋もれてしまうことはほとんど無い」とのことでしたが、私には当てはまらないようです。

例えば、カフェテリアで親しい友人と談話しているときです。それまで目の前にいる相手に集中しているのですが、隣のテーブルから自分の興味あるワード—好きな本のタイトルやアーティストの名前など—がフツと耳に入ってしまうと、聞こうとしなくても自分の意識が隣の会話へと移ってしまっ、友達に話しかけられても適当な相槌を打つくらいしかできなくなってしまうことが多々あります。あえて注意をそらしているつもりは無いのですが、図と地がすぐに入れ替わってしまうようです。そして、注意を目の前の相手に戻そう戻そう、隣から聞こえることなどシャットアウトしてしまおうと意識的に試みるのですがなかなか上手くいきません。これは、知らずの内に目の前の相手との会話よりも隣で繰り広げられている会話のほうが重要であると判断しているのでしょうか。

それとも自分が注意力散漫なのか。先生が仰っていたように、2つのことを図とするのは難しいものなのですね。一度に大人数に話しかけられても対応できる人もいますが、そういう人は知覚能力がずば抜けているのかなあ、などと思ったりしました。

<Yさん>

私はふつうの公立中学校へ通っていましたが、そこでの美術の時間に先週の授業プリント図3(c) Bilvet を実際に自分の手で描いてみる、という授業がありました。見本を手には、「こんな不思議な絵そう簡単に描けるのだろうか」と思いましたが、ほんの数分で仕上がり、少し目線を離して自分がたった今描いたものを見ました。これがまた不思議なことに、たった今自分で描いたものであるにも関わらず、まるでこの世に存在してはいけないうなもののように感じられたのを今でも覚えています。その後、家に帰り色鉛筆で色分けをしたりしましたが、それでも不思議な感覚は消えませんでした。今回の授業はそんな不思議なものがたくさん知れてとても勉強になりました。

<Nさん>

知覚のパターンにおける「ゲシュタルト」の説明で、音楽のメジャーとマイナーには以前から関心がありました。私は、高校の弦楽器のクラブ活動で、合奏をする際に「転調」のある曲でメジャーの明るさとマイナーの暗いイメージを感じていました。これは、メジャーとマイナーで構成される音に変化があるから、メジャーは明るく、マイナーは暗く感じるのだ、と考えていました。

しかし、今回の「ゲシュタルト」の講義をきいて、個別の音ではなく、私たちがその個別の音を全体として捉えた

結果、メジャーは明るく、マイナーは暗く感じるのだということが理解できました。クラブ活動での合奏の時も同様に、個別の音に変化したとしても、その1つ1つの音が全体として、様々な楽器と一緒に演奏されることによって、私たちが感じるイメージが変わるのだと思いました。

私たちは、物事を個別に感じていると考えていましたが、実は集まった全体として物事を捉えているものがたくさんあると思いました。

<Mくん>

ゲシュタルトという考え方は特に面白い・興味深いと思いました。僕は音楽を作ることがあるのですが、メロディーやコードにゲシュタルトを感じることもありますし、ひとまとまりのコード進行にそれを感じることもあります。曲の各セクションごとにも感じることもありますし、曲全体にもそれを感じるがあります（もしかしたらこれはゲシュタルトとは呼ばないのかもしれませんが）。そういった意味でミニマム音楽はゲシュタルトの崩壊に近いものがあるのかなあと思います。絵画でもそれを認識するときに一つ一つの色を見る訳ではなく総体として見ているからこれもゲシュタルトかなあと感じました。

<Aさん>

今回の授業で私は特に、「図と地」の話がおもしろかったです。人間は「同時に感覚信号として入力された要素でもすべて同じ度合いで知覚されるわけではなく、要素間で際立ちの度合の差が生じている」ということで、その例もプリントにいろいろと挙げられており、なるほど、と思いました。私も周囲がうるさい環境でも眠れることや、逆にうるさい中で寝ていても自分の名前が呼ばれるとすぐ起きれるという経験が日常的にあります。

またオーケストラやアーティストなどのCDを聞いていても、気づけば自分の興味のあるパートだけを追って聞いていたりするといった経験もあり、これらは人間の知覚における「図と地」の現象の現れだと思いました。

また図2の「図と地の分化」の図を見た時に、私と友人とでは最初に全面に見えたものが違い、「図と地」の現象にも個人差があり、おもしろいなと思いました。

<Iくん>

ある授業でノートをとっていると、「壊滅」と書くところで何故かペンが止まってしまいました。何度書き直しても「滅」というたった一文字が、日本語ではない何かの記号にしか見えませんでした。僕にとってこの体験は、とても奇妙で

一種の不安を伴うものでした。しかし授業でこれと同じことが「ゲシュタルト崩壊」の例として取り上げられたとき、これまでの不安が払拭され妙に納得してしまいました。

いままで不思議に思えてきたこの一連の現象それ自体やその原因が詳しくわかったわけでもないのに、この現象が「ゲシュタルト崩壊」という言葉で括られた途端、なぜか安心してしまったのです。もちろんこんなふうを感じるのは自分だけで、認知言語学とは直接関係ないのかもしれませんが。しかし、普段考えもしないようなことについてじっくりと考えることができたという点で、これからの授業に対してもよりいっそう興味がわいてきました。

<N さん>

中学3年生の時に、文化祭でクラスの展示が「錯覚」というテーマでやりました。木で家もどきみたいなのを作り、実際は傾いていないのに傾いているように見える錯覚や、新島襄の仮面を作って目をくりぬいてどこに私が移動しても新島襄がこちらを見ているように感じるもうなど、全部は思い出せませんがとても印象に残っているのをおもえています。最近私が興味をもった錯覚は

[http://web.mit.edu/persci/people/adelson/checkershadow\\_illusion.html](http://web.mit.edu/persci/people/adelson/checkershadow_illusion.html) のページの A と B は違う色に見えるのに、同じ色という錯覚です。チェッカー・シャドウ錯視というらしく B は円柱の陰にあると脳が判断し A より B を明るく色だと補正するということでした。知らない間に脳が補正しているなんて不思議だ。日常生活でも、人間は脳にだまされているのかな？と思いました

<U くん>

最近英語の発音の勉強をしてるのですが、今まで「v」を「b」と発音していたことに気がつきました。よく聞くと全然違う音なのに僕たち日本人はこれらの区別をつけていないのだなあということが分かりました。これがカテゴリー化ですね。僕はよく英単語の「difficult」と「different」を読み間違えることがあります。後でしまった一と思って、なんでこんなミスをするのだろうとよく思うのですが、これがゲシュタルトですね。

<N さん>

一人間は「人間として」しか世界を捉えられない—という言葉がすごく印象に残っています。この空間にあるものすべてを捉えることができていないわけではない…今までそんなことを考えたことはなかったけれど、言われてみればその通りだと感じました。

同じ空間にいても、イヌやネコ、その他多くの動物や植物と私たちとは、見え方、感じ方が大きく異なるのだなあ、当たり前のことですが改めて納得しました。

—誰もがヒトとしての「知覚の枠」に閉じ込められている—という言葉も印象に残っています。私たちの祖先がそう名付けたら分類したりしなければ、今とはまったく異なるものを見方をしていたのだと思うと、すごく不思議な感覚に陥ります。今は“赤”とみなしている色も、“青”と名付けられていたらトマトやポストは“青い”ものだとみなすようになっていた…やっぱり変な感じがします。自分がいかに文化や社会に左右されているかを、今回の授業で痛感しました。

<T さん>

チャップリンのお面の映像が、とても印象深かった。先生が映像を停止し、説明されるまで、私はこの映像の意味するところが全く理解できなかった。私には、お面の裏面が膨らんで見えることがなかったのである。しかし、先生の説明と映像の停止によって、ようやく私にも、お面の裏面が膨らんで見えるようになり始めた。このことは、何か認識の問題に関係があるのだろうかと思いついた。何も考えずにボーッと見ていると、何も起こらない。しかし、意識したとたん違ったものが見え始めてくる。これに似た出来事として、私が経験したことは、今までは何も意識せずに見ていたAさんに対して、誰かが「〇〇さんに似ている。」と、私に言う。すると私は、意識してAさんを見だしてしまう。そうすると、Aさんにしか見えなくなってしまう。人間の知覚は一様でないということは、一人の人間に対しても言えるのではないだろうか。意識の違いで、かなり変わってくると思う。

<N さん>

前回の授業を受け、私たちが毎日何気なく物を見、その物をその物として認識している過程には、今まで一度も意識した事のないような、人間の脳の働きがあるのだなと思いました。

今までも、いくつかゲシュタルトや図と地に関係のある体験はありましたが、実際自分でも驚いた体験が、この間の授業です。授業のプリントで Necker Cube の図がありましたが、あの図に関して、私は「左下の四角形と右上の四角形。見方によって飛び出るほうが、変わって見えるでしょ??」というような話題に入ると予想していましたが、これを「ただの棒の集合体には、見えない」という話題になり、そこで初めてこれがただの平面に描かれた棒

の集合だという事に気付きました。

どう頑張ってみても、あの図がただの棒の図形には見え  
ず、立方体のキャビネット図にしか見えません。これが図  
と地なのだなあ!!!と感じました。頑張ってみてもどう  
にもならないほどに、私たちの図と地によるものの認識は  
強力に私たちと結びついているのだなと思いました。

たとえばこの Necker Cube の図から、色々な順番で一  
本ずつ線を消していった場合、私たちはどの時点で立方体  
に見えなくなるのでしょうか？こういった図の場合、これ  
を立方体と見せている要素は何なのでしょう？研究して  
みると興味深い結果がえられそうです。また、こういった  
実験をした人は今までにいたのでしょうか？人間の認知や  
知覚に関する様々な実験とその結果もいろいろと調べてみ  
たいと思います。

<Oくん>

前回の授業は心理学の授業と重なっているところもあり、  
とても興味深い内容でした。先日私はバイト先のレストラ  
ンでシチューのオーダーを受け、お客様に白いシチューを  
持っていきました。するとそのお客様は「普通シチューっ  
て言ったら黒いシチューやろ」とクレームをつけてきまし  
た。私のシチューの認識は白色。お客様のシチューの認識  
は黒色。これは私とお客様のカテゴリー化の違いではない  
でしょうか？

<Yくん>

見えているのに認識できないということは、思い返して  
みれば私の生活にもあふれています。朝急いでいるときに  
限って探し物がない。後で探してみると目の前にあった、  
あったけど気付かなかった。なんてことはザラです。また、  
毎日大学に徒歩で通学しているのですが、今日と昨日で何  
が違ったかといわれると、何も思い出せなかつたりします。  
本当はすれ違った車や人、天候や日差しの強さ、空気の匂  
いなど、数え切れないほどの変化があります。

つまり、通学中は私は何も見ていないと言っても過言で  
はありません。これは何も私に限ったものではないと思  
います。「認識」という人間の機能、恐らくは脳、の共通した  
働きではないかと思えます。でもそれは決して悪いことで  
はなく、多すぎる情報で脳をパンクさせない為のブレー  
キみたいな機能なのではないのでしょうか。無意識的に脳が  
情報を認識、選別することによって人間は誤認したり、錯  
覚したりすると思えますが、日常的にそんなことをしてい  
るのかと思うと、普段口にする「現実」というものがなん  
だかよくわからないものになるような気がしました。

課題 4 日本語と英語に現れた認識の違いについて実例を  
挙げて論じて下さい。

<Iくん>

英語と日本語の違いの一つは、英語は大切なことを最初  
に言い、後から付け加える形で説明していくが、日本語は  
文の要になることを最後に言うという点であると思う。例  
えば、英語では動詞が主語の直後にくる。反対に日本語の  
場合は動詞は文の最後である。そのため、日本語では最後  
まで何をしたのか、どうなったのかという大事な内容が最  
後までわからない。また否定の語もここで使われるために、  
賛成か反対かなどというはっきりとした意思や意見も最後  
まで聞かなければわからないことになる。何かを形容する、  
また説明する時にもこのことは言えると思う。

もう一つは、何かの場所を説明するときなどに日本語で  
は最後に「それは左手にあります。」という表現をするが、  
英語では“you will see on your left.”という表現になる。  
また、否定形の疑問文に対しての応答にも違いがある。英  
語では行為そのものなどに対して肯定や否定をするため  
“No, it is.”というような返事はないが、日本語では文に対  
しての返事がされるため「はい、しませんでした。」とい  
うような応答も可能である。

<Hさん>

私たち日本人が英語を学ぶ際に、英語を難しいと感じる  
時、日本語と英語のとらえ方の違いを意識する。文章の並  
び方からして日本語と英語には違いがある。基本的に日本  
語は、主語と述語の間にいくつもの修飾語を加えてひとつ  
の文が構成されている。これに対し、英語はまず主語と述  
語を並べた後、修飾語を加えて文ができあがる。このよ  
うに文の構成の順番が違うことで、私たち日本人が英語を日  
本語に訳そうとする時など特に、その難しさであったり、  
違いなどを感じる。文を構成する様々な品詞をひとつひとつの  
情報として、積み木のように組み立てて文ができあが  
っていると考えると、完成する物は同じでも、この組み立  
て方が日本語と英語では違うのだと思う。

私たち日本人は普段からこの「誰が」、「どういう状況で」、  
「何をした」という順番で文を理解することに慣れてきた。  
逆に英語圏の人々は、「誰が」、「何をした」、「どういう時に」、  
「こんな状況で」という順番の文に昔から慣れ親しんできた。  
ここに文化の違いが生まれ、理解の仕方も違ってくる  
のだと思う。だから、私たちが英語で聞き取ったことを間  
違って認識してしまったり、これと逆のことが起こるこ  
とも有り得てしまうだろう。私はそこに、英語と日本語のと

らえ方の違いを感じる。

<S くん>

授業で使用したレジュメには、固有的指示枠に基づいた言語表現がいくつか載っていた。例えば、「テーブルの耳の部分」「塀の膝下の部分」などがあつた。これらは、人間の身体部位を表すのと同じ表現を用いてそのものの様子を表現している。では、「指のはら」や「鼻の頭」など体の部位を体の部位で表現しているものも、同じように固有的指示枠に基づいた言語表現なのだろうか。それとも、それとはまた別のものに分類されるのだろうか。

今回のこの固有的指示枠の内容というものをうまく理解できなかったために、自分では判断がつかない。だが、もしこれら体の部位を体の部位で表現しているものも固有的指示枠に基づいているものとしたら固有的指示枠を用いた表現についてのおもしろさというものが感じられる。

<N くん>

私は文法に注目しました。英語の述語は早く、日本語の述語は遅いという点です。例えば、最初の「私は文法に注目しました。」は、「**I paid attention to the grammar.**」と表現されます。英語では「注目する」ことをまず文の前半部に置きますが、日本語では最後に来ます。つまり、英語はすぐに結論がわかるのに対し、日本語は最後まで結論がわからないということです。(何に「注目する」かについて考えれば逆になりますが)

英語について言うならば、話が早くて急ぎの用なら助かります。日本語について言うならば、ハラハラドキドキしたりさせられたりできます。

このような点から、日本語話者が英語を、英語話者が日本語を理解するときには違和感が生じるのは当然です。どちらが好みかは人それぞれでしょう。

<M くん>

固有指示枠についても面白い話がある。実は私は10円玉は「10」と書いてあるほうが「表」で平等院鳳凰堂が「裏」だと思っていた。しかし、ある日テレビで本当の「表」「裏」は私が思っていたのと逆であった。このように私はおそらくお金を使うにあたって「10」と書いてある方がわかりやすいと思って勝手にそちらを「表」だと決めつけていたのだ。この場合からして、我々は自分の都合に合わせて固有指示枠を作っているのだ。

<Y くん>

今回の課題は、日本語と英語の発想の違いについてということだが、僕はいろいろ考えてひとつの違いを見つけた。それは、英語には無生物主語が多いが日本語には少ないということである。英語は[**Medicine makes me fine.**]などと無生物主語を使った文がたくさんある。この文を日本語に訳すと「薬は私を元気にさせる。」となるが、実際日本語で話すときは「私は薬のおかげで元気になる。」などと話すだろう。これが日本語と英語の発想の違いである。

固有的指示枠については共感することが多かった。東西南北は位置を知るためには大事な要素だと思うが、方位がわからない場所にいたら使えない。左右についても話し相手が向かい合っているのか同じ方向を向いているかによっても違う。いちいち「向って右」とか言わなくてはならない。このような固有的指示枠は生活していると身の回りにたくさんあると思った。

<I くん>

日本語と英語の発想の違い、つまり言語表現の違いは、時に一文章の意味を大きく左右し、ミスアンダースタANDINGを生じさせる要因でもあると言えるだろう。日本語の発想と英語の発想を比較してみれば、前者は説明だけして結論を述べない場合が多く、一方後者は全く逆の結論先型である。その例として、国際電話の掛け方というパンフレットの中に「使われなかったコインおよびテレフォンカードは戻ります」とあり、その訳文として、**Your remaining coins or telephone card will be returned.**とあつたという。ここで、この注意書きがなされているのは、コインやテレフォンカードを忘れる人が多いから、注意を喚起しているためだというが、結論先型発想の英語ではこれはナンセンスであるという。よって、ここでの訳は、**Don't forget to take your remaining coins or telephone card.**と記すのが、最も効果的だと考えられる。

<D さん>

授業中に、もの一つ一つには前後、表裏等の指示枠がある。という説明を聞いたとき、もし人間が360度を見渡すことが可能で、360度どちらでも好きな身体面を進行方向として移動することができたとしたら、この世から前後の区別は存在しなくなるのかな?と思いました。

また、もし人間がゴムのような形状で、たとえばタコのように八本足だったとしたら左右という概念が存在しなかったり、その八本の足それぞれを言い表すような言葉が生まれていた可能性もあるのかな?と思いました。

<Yさん>

日本語と英語のとらえ方の違いを挙げたいと思います。英語は同じものを指す場合でもそれが単数のときと複数数のときとで言い方を変える場合がほとんどなのに対して、日本語はその数に関わらず一定の呼び方をします。また、日本語はものによってそれを数える単位（イカなら「～杯」、猫なら「～匹」、牛なら「～頭」）を区別しますが、英語はそういった区別をしません。

<Nさん>

今、日本列島は新型インフルエンザの脅威に晒されている。神戸や大阪に感染者が多いことから、「言っている間に京都でも感染者が出るかもしれないね。」という会話を最近よく耳にする。しかしウイルスにとって、県境などは無でしかないだろう。「右・左」「前・後」「国境」などは、目安としては大変便利だし、こういったものを定めることは悪いことではないのだが、人間がこうだと定めたにすぎないということをお忘れず、「前だから良い、国境の向こう側のことだから関係無い」などとは思わないべきだとわたしは考えている。

<Nくん>

例えば、僕は飲食店でバイトをしている。店で、ご飯はいかがですか？とたずねると、「あ、はい」と返ってくることもある。ご飯がほしいのかそうでないかわからない。言葉どおりにYESと受け取ってご飯を渡すと、いらぬと言われることも多い。これが英語ならば、ご飯を渡すべきかそうでないのか迷うことはないだろうなあと思った。

<Iさん>

絶対的指示棒については京都で場所を示すのに、御所を基準にして「上がる」「下がる」と言うのもそれにあたるのではないのでしょうか。固有指示棒については、コラムで車の前部分を顔と見てしまうということが紹介されましたが、「ウィンカー」(英語での blinker も)も車を顔と見立てたから生まれた言葉ですね。

物を生き物に見立ててしまうというのはとてもおもしろいと思いました。椅子の「脚」という言葉などはそう呼ぶことが当たり前のように思っていたので、そういわれれば自分たちの棒で椅子をみているんだなあ気づかされました！！

<Tさん>

今回の授業で日本語と英語の捉え方の違いについて学んで、とても興味を持ちました。他に日本語と英語の捉え方の違いについて考えてみると、日本語では「時間になった」というのに対して、英語では、「It became time.」と言わないことについても捉え方の違いがあると言えると思います。また、この日本語と英語の捉え方の違いが英語が日本人にとって難しいと感じる原因になっていると思います。

<Sさん>

今まで全く意識したことがなかったが、知らないうちにかなりの固定的指示棒や相対的指示棒を使っていたんだなと思った。日常生活で物事を表現するときに、左右や上下という言葉は色んな場面でたくさん使われていると改めて思った。しかし日本人は絶対的指示棒はほとんど使わないなと感じた。寝るときに枕の向きを考えるとときに「北枕」と表現したりする以外はほとんど使っていないなと思った。方角を使う表現は私たちには混乱しやすいからかなと考えた。その言語によって分かりやすい表現の仕方があるんだなと授業を通して、よく分かった。その地域や言語によって色んな指示棒があり、興味深く面白いなと感じた。

<Nくん>

小さい頃まだ方向もよく分からないとき、とりあえず右が東だと思っていたときがあったが、右という言葉は固有的、相対的であり東という絶対的指示棒との違いが認識できていなかった。

<Tくん>

以前から疑問ではあったのだが、何故英語は「彼ら」「彼女ら」「それら」を一様に“**They**”で表現するのか。一人称や二人称の複数形は“**They**”では無いという点も気になる。勿論日本語では、男性の集団に「それら」などと言えば、侮蔑表現以外の何ものでもない。しかも、「彼」「彼女」「それ」と、単数になった場合は“**He**”“**She**”“**It**”というように、違う語を使う。

ここで僕が思うのは、英語話者にとって、三人称の複数(集団)とは背景であり、そこから個別に抽出する必要のある要素が無い場合は、人も物も変わらないのではないかということである。

そうだとすると、分解した所で重要な要素(上の例でいえば一人称や二人称の存在)を含まない総合(集団)は個別に捉える必要がないという、非常に自分本位で合理的な英語話者の姿が見えてくる。そして、単数である時は、そ

もそも分解の余地が無いため、個々に表現されるのではないのだろう。

ここに僕は、分析と総合が文法体系にまで染み付いた英語の合理性を見ると同時に、一人称が多種多様で、人や物を区別して呼ぶ日本語の精緻さを感じた。

<Yさん>

★相対指示枠・絶対指示枠に関する体験談

電車に乗っていて車内放送で「次の駅では左側のドアよりお降り下さい」といわれ進行方向に対して逆（後ろ向き）に立っていたので自分の見えている左右と異なっていたので戸惑ったことがある。

<Nさん>

日本語と英語のとらえ方の違いについて思い浮かんだのは、日本語の自発表現だ。その例は、私が高校時代和文英訳で困った文で、「彼にはあの失敗が非常に悔やまれる。」というものだった。このほかにも「思われる」「偲ばれる」「感じられる」というような表現は英語にはない表現だった。これを英語にしても、「He regrets that failure.」というように、あくまで「彼」が「悔やむ」という行為者中心の文になってしまう。この例は今日の授業でも取り上げられた、英語は「する」型言語、日本語は「なる」型言語という池上氏の言葉にあてはまると思う。

<Sくん>

「英語と日本語の物事の捉え方の違いについて」

僕の感じる違いの一つ目は、英語は自分と他の何かを意識するのに対し、日本語は自分一人のみを意識する傾向にある、という点です。たとえば、interesting は、日本語に訳すと「おもしろい」ですが、元々は興味を引くという意味の interest という動詞が変形してできたものなので、厳密に言うと「興味を引くような」とするのが妥当です。

ここで、英語の認識を採用して考えると、自分ではない誰か、もしくは何かが、自分に対して影響を与え、「ああ、彼は僕の興味を引いたよ」という風な思考になります。これに対し、日本語の認識だと、自分以外の誰か、もしくは何かをみて、自分が「あれはおもしろいと思った」という思考になります。

ぼくが思うに、日本語よりも英語の方が、自分以外の人を”動作主”として、また自分を受け手として意識していると思われま。このような意識は、「人は他の人に絶えず影響を及ぼしている」という潜在意識を生むと思われま。日本人が海外の国の人々に比べて消極的なのは（僕はそう

思います）、行動が他に影響を与える動作ではなく、傍観者に対するむなしい訴えと考えているからで、この意識の違いは日本語と英語の物事の捉え方の違いに起因していると思われま。

<Iくん>

英語と日本語の捉え方の違いについてはさまざまなものがあると思うが、私が英語を学習していて気づいたのは「数」についてである。日本語は数について深く言及することはないが、英語では数については厳密である。例えば、可算名詞と不可算名詞にみられるような概念は日本語を母語とするものにとっては難解なものであると思う。「家具」が英語では数えられない名詞として扱うところなどは英語らしさを感じる。また、単数形、複数形というものが存在し、それによって動詞が変化し、be 動詞が変化する。まさに英語は数にうるさい言語だと思う。

一方、英語には「傷」にあたる言葉が1つしかないと聞いたことがあるが、日本語には「掻き傷」、「擦り傷」などさまざまな表現方法がある。これも民族性の違いなのだろう。言葉の違いには多種多様な民族、文化の違いが浮き彫りにされていて興味深いものがある。

<Nさん>

私は、サビア・ウォーフの仮説にも、その反論にも、100%は賛成できません。一見、矛盾的ですが、まず肯定派の意見に関しては、どちらかというと言語が思考様式を決定する」というよりは「思考様式が言語を決定する」というベクトルの方が納得できます。また、否定論についても…言語というのは今や立派な外的要素です。この世に誕生し頭を使うまでに我々は言語を使います。それなら、きっとそれぞれの言語によって注目する点は変わってくるでしょう。たとえば、英語ならsを用いて単複の差をはっきりさせています。すると、自然に単複の差に注目する様になるでしょう。ですから、言語が思考に影響しないと考えるのは難しいと思います。

<Tさん>

日本語と英語のとらえ方の違いについて、次の例もあげることができると思う。英語ではどんなときも「私」はIだが、日本語は自分と相手がどんな位置関係にあるかによって自分のことを違う名称で言うことがある。例えば、自分の子供には自分のことを「お父さん」「お母さん」、教え子に対しては自分のことを「先生」と言ったりする。また、他人のことを言う時も、日本人は立場、位置関係をあらわ

す「社長」「部長」といった役職名や「奥さん」「旦那さん」といった言葉を使うが、英語ではそんな使い方をしない。これは日本語と英語の発想の違いとすることができるだろう。

それから、絶対的指示辞について少し調べてみると興味深いことが書いてあった。メキシコ山岳地帯では「左右」でも「東西」でもなく「上り側・下り側」と表現したり、ある島では「海側・陸側」というように、その土地の立地条件が空間表現に反映されているのだ。言葉と環境はある程度関わりあっていることを実感した。

#### <Cくん>

日本語と英語のとらえ方が異なる表現には、日本語では、「ここに 20%割引って書いてあるよ。」と言うが、英語では、「It says 20 percent discount!」と言う例があります。この英語を日本語に直訳すると、「それは 20%割引って言っている。」という不自然な日本語になってしまいます。この英語の表現ではあたかも「ここ」がしゃべれるような扱いをしていますが、これは日本語では普通使われない表現です。こういう例からも、「する」的言語と「なる」的言語の違いがわかります。

#### <Tくん>

英語には「驚く」という単語はない、この言葉を最初に聞いた時、自分には意味がわからなかった。その時までには surprise という単語は知っていた、では驚くという単語はないということはどうゆうことなのか。英文で「私は驚いた」と表すとき I was surprised と表す、これはつまり「私は驚かされた」と表すのである。surprise という単語は「驚く」ではなく「驚かせる」だったのである。

日本では驚くという行為は能動的な行為として表される。しかし英語圏では驚くという行為は受動的な行為として表されるのである。一見、この行為は見える画は同じである。しかしこの行為は文化圏が変わると能動/受動、という全く逆のとらえ方をするのである。

#### <Nさん>

私が日本語と英語で違うなあと感じたことは、日本語で言う「つくる」という言葉のとらえ方だと思います。「つくる」は日本語でも「作る」「造る」「創る」などさまざまな漢字があてはめられており、若干意味が異なってきますが、どの漢字でも「何かを生み出すこと」という意味を表す言葉だということは一致しています。

「つくる」は英語では make ですが、これはどうでしょ

うか。make には「つくる」以外にも「成す」「行う」などの意味も含まれています。また make を使った熟語は多数あり、それらの意味も見てみると make はかなり広い意味を持っているといえるでしょう。

言語が違くと、ひとつの単語が持つ意味の広さも大きく変わってくるんだなと感じました。

課題 5 カテゴリーにおけるプロトタイプと周辺の成因の具体的な例を挙げ、そのように認識される理由を分析してみてください。

#### <Sくん>

##### 「球技」カテゴリー

P：野球、サッカー、バスケットボール、テニス

Not-P：ビリヤード、ボウリング、ホッケー

レジュメの「魚」カテゴリーと同じように、日本人が「球技」と聞いてすぐに考えるようなものは上の P に書いたものであろうと考えた。Not-P に含まれるビリヤードやボウリングもとてもメジャーなスポーツではあるが、「球技」としてはなかなか名前が出てこないのではないだろうか。それゆえ、多くの日本人にとっては「球技らしい」ものが野球やサッカーなどであり、ビリヤードやボウリングは周辺のなものであろう。このような、理由から上記のようにタイプ分けをしてみた。

#### <Nくん>

少しいれ外れな気もしますが、私は「ヨーロッパの国」というカテゴリーについて考えました。プロトタイプの成員は、イギリス、フランス、ドイツ、スペイン等で、周辺の成員は、モルドバ、サンマリノ、アンドラ等が挙げられると考えました。

プロトタイプの成員に挙げた国は生活している中でよく聞く国名ですが、周辺の成員に挙げた国は聞く機会があまり多くありません。同じ「国」ではありますが、歴史的背景や世界に与える影響力等によって、このような分類ができると思います。

プロトタイプの成員と周辺の成員の関係にはメジャーとマイナーの関係があると私は考えます。

#### <Sくん>

たとえば、野菜というカテゴリーにおいては、ニンジン、タマネギ、ナス、ジャガイモなどはプロトタイプの成員であり、ズッキーニ、アボガドなどは周辺の成員であると言えると思う。

ニンジンやタマネギなどは、日本の家庭料理の中でもよく用いられ、わたしたち日本人にとって一般的な野菜であるが、ズッキーニなどは、日本料理ではあまり用いられることはなく、比較的わたしたちの日常の食生活からは連想しにくい野菜であるからだ。

<M くん>

たとえば、「車」におけるプロトタイプは「乗用車」で、周辺の成員は「ダンプカー」や「ショベルカー」などが挙げられる。他の例として、「死」におけるプロトタイプは「老衰」で、周辺の成員は「脳死」「植物状態」が、「strong」におけるプロトタイプは「強い」、周辺の成員は「(スープなどが) 濃い」が挙げられる。

これらのプロトタイプに共通することは、

1. 先に思いつく
2. 多くの人が思いつく。

であると思う。

<O くん>

幽霊について書いてくださいと言われると、たいいてい人は足なしのものを書くと思われま。でも幽霊といっても、みんなが知っているものの中には首が長いものもあるし一本足のものもいます。この場合のプロトタイプの要因は足なし幽霊であり、周辺の要因は首の長い幽霊や、一本足の幽霊です。

<なぜプロトタイプの要因なのか>

上で述べたのは、あくまでも日本の場合の話です。以前テレビで見たことがあるのですが、他の国では、幽霊といえば「人間に限りなく近いもの」と考えている国もあるそうです。この場合その国の幽霊というカテゴリーのプロトタイプの要因は人間に限りなく似ている幽霊になり、足なしは周辺の要因になります。

よってプロトタイプの要因になるのは、その国の古くからの考えかたや宗教などが深く関係しているのだとかんがえられます。

<T さん>

授業で出された課題について考えたとき、わたしは漠然とした言葉しか浮かばなかったがこの言葉についてプロトタイプの成員と周辺の成員があると思うので一応説明してみたいと思う。

『かわいい』という言葉においてプロトタイプの成員としては顔などが愛らしいようすであることを言う。そして周辺の成員としては小さいまたは幼いようなしぐさなどを

見たときにも使われると思う。たとえば人間であっても背が低ければ『かわいい』と言われるし、しぐさが幼いようであれば『かわいい』と言われます。しかしそれらは『かわいい』という本来の意味を少し違った意味でとらえ、表現していると考える。よって言葉そのものの本質のイメージと使い方が合致しているものがプロトタイプの成員と言え、本質のイメージと使い方が少し変えられているのが周辺の成員と言え、これをまとめるカテゴリーがあるのではないかと思う。

<T さん>

プロトタイプ理論について興味深い例がなかったので、家族的類似性について論じます。

家族的類似とは、プロトタイプ理論と同じように語の定義を必要十分条件で規定しようとする古典的カテゴリー観と反対に位置する考えで、具体的には、「ゲーム」という語は「娯乐的」「勝敗が定まる」という共通の特徴をもつだけで、明確な定義があるわけではないということ、と私が調べるところによりますと、そう述べられていました。

この理論を私は正しいと考えます。ただ、家族的類似性というネーミングはあまりふさわしくないような気がします。なぜなら、家族は一つ屋根の下に住んでいるだけで、個人個人に共通する特徴が必ずしもあるわけではないと思うからです。私ならグループ的類似性と名付けたいです。

<N さん>

近頃 J-POP を好んで聴くわたしの耳にもあるカテゴリーの音楽がよく入ってくるようになった。そのカテゴリーとは演歌だ。演歌歌手の名前をざっとリストアップしてみる。

石川さゆり  
五木ひろし  
北島三郎  
小林幸子  
ジェロ  
さくらまや  
・・・

演歌歌手のらしさ、とは「着物を着ている年配の人」というイメージがつよい。この 6 名の場合プロトタイプの成員は、石川さゆり、五木ひろし、北島三郎、小林幸子であり、また周辺の成員とは、ジェロ、さくらまや、であるといえよう。

では何故プロトタイプの成員で挙げられた人たちはプロトタイプの成員であるといえるのだろうか。それは先程述

べたように、一般的に演歌歌手とは「日本人・ある程度の年配」であることが多い。それゆえに外国人演歌歌手であるジェロが、小学生演歌歌手であるさくらまやが最近注目されているのだろうとわたしは思う。

<M さん>

カテゴリー『花』

プロトタイプの成員：桜、梅、桃、薔薇、チューリップ、百合、菊、向日葵、コスモス、タンポポ 等  
周辺の成員：ピンポンマム、グロリオサ、デルフィニウム、ブーゲンビリア、ランタンキュラス 等

<何故プロトタイプの成員はプロトタイプ的であるか？>

①日本において歴史を持っている。例えば、桜、梅、桃、菊などは古典の文学作品中にその名が度々登場したり、絵画・掛け軸等にも描かれていて、「日本的な花」というイメージを我々日本人が持っているから。  
②物理的アクセスが容易なため。春には桜、梅、桃、タンポポ、夏には向日葵、秋にはコスモス…といったように季節によるがこれらの花は道端に群生していたり、木が公園や庭に植えられていることが多いので目にする機会が多い。対して周辺の成員に挙げたピンポンマム、グロリオサ等はかなり品揃えのいい花屋にでも行かないと目にするのは日常生活においてはほとんどない。というのも知名度がない＝プロトタイプ的ではないからだろうが、人目に触れることが少なくなるせいでより一層周辺の成員の端のほうへ追いやられてしまうのだと思う。

また、桜やチューリップなどは童謡の題材としても使われており、花そのものとしての画像ではなく、その名前が我々にインプットされていたりするのも一つの要因かなと思う。

<T さん>

私は、家族的類似性にとっても興味を持ちました。確かに父親と母親は血がつながっていないにも関わらず、家族全体としては客観的にはまとまりを感じます。もし、夫婦に子供がいたとしたらそのことは、考えやすくなると思います。再婚した夫婦は別問題ですが、子供がいるということは、2人の遺伝子を受け継いだ存在がいるということです。その子供の存在は、家族というものに客観的なまとまりを感じさせる大きな原因だと思います。

では、子供のいない家庭はどうでしょうか。子供のいない家庭に限ったことではありませんが、結婚というものをすることによって、互いの親族が結びつきを持つこととなります。そのことは、独身のときとは違う、非常に大きな

事柄だと思います。親族という存在によっても家族に客観的にまとまりがあるといえると思います。

<M くん>

カテゴリーを「(日本においての)ジャズ」としてみます。

日本でのジャズのプロトタイプの成員はスイング・ジャズやビック・バンドといったものが多いのではないかと思います。周辺の成員としては比較的新しい時代のジャズでは無いかと思います。

プロトタイプの成員になる理由として、スイングジャズやビックバンドはコードに込み入ったテンション等が少なく、コード進行もそれほど難解なものではなく、そしてテンポが早い＝ノリが良い。こういったものが挙げられると思います。

また、スイングジャズやビックバンドがプロトタイプの成員になったのかということ、ジャズと初めて接する人たちの多くが吹奏楽部・プラスバンドであるからだと思います。また、そのような活動を元にした映画もありました。それもプロトタイプの成員に成り得る理由だったと思います。

また、ジャズがどんどん新しくなるにつれて分かる人にしか分からない、と言った様な事態が起こってきたように思います。これはクラシックと現代音楽の受け入れやすさの違いと似ているように思います。閉塞的になっている、まだ多くの人はいまだ受け入れていないもしくは知らないのではないのかと思います。

まとめると、サウンドの受け入れやすさと使用回数の多さがそれらをプロトタイプの成員にさせているのだと思います。

<I さん>

普通の生活のなかでも「家族的類似性」を持つものはたくさん存在する。例えば、英語でいう“school”は学校という一つのくくりで表わされるが、学校にも様々なものがある。

社会にでる準備や、集団生活を営むことを目的とする(つまり義務教育である)小学校や中学校も「学校」の一つである。しかし、自分が興味のある内容や、将来に必要な事柄を専門的に学ぶことを目的とする大学や専門学校も「学校」という枠の一つである。このように目的や本質は異なるそれぞれの学校であるが、私たちは「学校」という言葉を聞くと勉強しているんだなあという印象を受け、得に「学校」というくくりについて疑問を持つことはない。また、「大学」というくくりの中にも、同志社大学や京都大学といったように様々な大学が存在し、その中にまた何について勉強するかという様々な「学部」が存在する。

このように、一つの言葉が持つ意味や概念はどんどん拡張していくことができる。つまり、一つの概念が持つ本質は一つではなく、共有する特徴を持ちながらも、曖昧なまま、様々に連続している多様なものの複合体であることが分かった。

<Nさん>

前回の授業ではプロトタイプ理論に関して、鳥が例に挙げられていたが、これは英語における品詞にもあてはまるだろう。ここでは例として動詞、名詞、動名詞をあげる。

動詞は『～する』といった動作を表すものであり、『食べる』『遊ぶ』などがこれにあたる。一方、名詞はものやことを表すカテゴリーである。つまり『食べる』『遊ぶ』は動詞カテゴリーのプロトタイプであり、『ボール』や『美しいもの』は名詞カテゴリーの典型的成員なのである。

さて、上に動詞、名詞について述べたが、英語には『動名詞』と呼ばれるものがあり、これは一般に『～すること』『～するもの』と訳される。つまりこれは完全ではないにしろ動詞カテゴリーに当てはまる要素は含んでおり、かつ同様のことが名詞カテゴリーにも言えるという周辺の成員だといえるだろう。

<Cくん>

「友達」というカテゴリーについて今回授業の内容を含めて論じます。まず、「友達」というカテゴリーの例を挙げたいと思います。最初は一番わかりやすい例からあげます。学生の場合で、毎日同じ教室で、勉強している仲がいいクラスメートは友達です。ほかの人の紹介で知り合って、それからずっと連絡があるし、たまに一緒に遊んだり、相手を会いに行ったりしている人も友達と言う。恋人関係はある程度でも友達と言えるだろう。

また様々な関係は友関係といえるんだけど、普通友達といたら、最初に思いつかれるのは一緒に遊んだり、勉強したり、仕事したりしている仲間だと私がそう思っています。要すると、このような仲間達は「友達」というカテゴリーのプロトタイプの成員だと思います。

今の教育会では、ある言い方があります。親と子供の友達のような関係は子供の成長にとっては一番良いことであると多くの人に認められ手います。だから、親と子供は単純な親子だけではなくて、友達とも言える。しかし、親子の代わり、友達だと言ったら、少なくとも変な気がする。このような例は講義で言った周囲成員ではないかと私が思っています。

<Mくん>

今回の課題に挙げられている言葉の中で「家族的類似」という言葉に興味を持ったので、少し自分なりに考えを述べようと思います。

まず僕の中でのこの言葉の大まかな解釈は「ある共通のカテゴリーの中に存在してるモノ（要素）の個々の繋がり

は断片的であり、それらが割と緩く繋がって全体を形成している」という事。  
これはネットや本などで個人的に調べた結果なので、本来の解釈とは少しズレているかもしれませんが、ここでは「自分の意見を述べよ」という事なのでこのまま進みます。まず簡単な例として僕の好きな「お洒落」という言葉を「家族的類似」を用いて説明すると

「一言にお洒落と言っても主観レベルですら膨大なジャンルがある。しかし実際にはお洒落と呼ばれる全ての対象を特徴づけるような単一の条件は存在せず、色の組み合わせが上手い、サイジングが上手、などの部分的な共通点によって全体が緩くつながっている」

こんな感じ。まあ少し堅苦しい感じになってしまったけど、要はお洒落という言葉はあるお洒落であるための要素同士の緩い繋がりによって成り立っている、という事だと思えます。

そしてこの考え方でいくとほとんどの言葉は何らかの小さな要素の集合である、と言えると思う。固有名詞は例外として、漠然と何かを指す言葉「靴」とか「自然」とか「人間」とか、考えればいくらかでも出てくる。

今まで無意識だった事を意識するだけでこんなに色々な事を考察出来るなんて認知言語学にますます興味が湧きました。

<Iくん>

カテゴリーをバイトとすると、プロトタイプの成員として考えられるのはコンビニの店員・店舗の販売スタッフ・清掃員・イベントのスタッフ・工事現場の交通整理などがあげられると思います。そして、周辺の成員と思われるのは知り合いもしくは自分の親の店の手伝い・おつかい（この場合は残ったお金を報酬として得るものとする）などです。このカテゴリーでは、共通点は働いてお金を得ること、プロトタイプの成員を決定づけるものはきちんとした契約が雇い主との間に存在するという事です。

<Yくん>

カテゴリ：TVゲーム

プロトタイプの成員：ドラクエ、FF、マリオ、ポケモン  
周辺の成員：脳を鍛えるゲーム系、Wii Fit、DSを使った  
学習系（TOEIC、料理等）のゲームなど

ぱっと思いついた分だけで分類をしました。まず、周辺の  
成員に含まれているものは最近になって生まれてきたもの  
が多いです。一昔前はTVゲームは子供がするもの、とい  
うイメージがありました。今は家族みんなでTVゲーム  
をする、というも珍しくないようです。

こういう時代背景もあって、脳を鍛えるゲーム系なども  
TVゲームに含めてよいのではないのかと思いました。後  
は使っている媒体です。DSもWiiも、インターネットな  
どができるにせよ、そもそもの機能はゲームをするための  
ものです。なので、その媒体を使う限り全てTVゲームに  
含めて良いのではないかと判断しました。

ただ、プロトタイプのものと違う点として、周辺の成  
員のものは多くが実用性や現実に影響（例えば料理なら実  
際に料理がうまくなれるというように）があるというこ  
とです。この点で後者は娯楽性に特化した本来の意味でのTV  
ゲームとは少し離れている、ということで上記のように分  
類しました。

<Nくん>

授業とは直接関係ありませんが、4ページのように「魚  
の絵を書いてください」と頼まれるとほとんどの人が魚を  
左向きに描くそうです。右向きではなく、正面・上からで  
もなく。

<Iくん>

なぜプロトタイプ的はプロトタイプ的なのか

パソコンのようなものについていうと、最も初期に普及  
した形が人々の記憶にすりこまれ、簡略化した図をイメ  
ージしたりするときに真っ先に思い浮かぶからだと思う。そ  
してそれは小さな子供にその物体を教えるときにも使用さ  
れることで、再び新たな世代に刷り込まれ、プロトタイプ  
的成員となるのだと思う。

消しゴムを連想してくださいと言われて果物の形をした  
消しゴムを連想する人はいないと思う。人がプロトタイプ  
的と考えるものは他のものと融合された、紛らわしいもの  
ではなく、そのカテゴリーが世の中に登場した時の最もシ  
ンプルな形のものなのではと僕は考えます。

<Tさん>

サラダのプロトタイプとその周辺例について

たいていの人がサラダと聞いて思いつくのは、レタスな  
どの葉を食べる生野菜などを切りドレッシングをかけたも  
の（以下グリーンサラダ）だろう。しかし、世の中には蒸  
し鶏のサラダや春雨サラダ、茶そばサラダ・フルーツサラ  
ダなど肉が入っていたり、野菜が少ない・入ってすらいな  
いサラダもある。

サラダはもともとはグリーンサラダのように生野菜の食  
べ方であったのだが、次第に「副産であり、食材をドレ  
ッシングやマヨネーズで和えたもの」がサラダとしての周辺  
例になっていったのだろう。とすると、オリジナルのものは  
プロトタイプになる可能性が高いと言えるのではないだ  
ろうか。

なぜなら、最初にできたものに名前を付けるとき、モノ  
と言葉の間でイコール関係が結ばれる。そのあと派生的に  
生まれてきたものに、どのようなものであるかを説明する  
ための言葉として、便宜上、最初のモノの名前(の一部)を  
付加させる。そうすることで、あとから生まれたモノは最  
初に生まれたものと関係性があるものとして認識され扱わ  
れる。この手順で上のサラダ周辺例がつけられていったと  
考えるならば、グリーンサラダがプロトタイプであり、そ  
のほかは周辺例である。

以上、計 495 名の受講者の皆さんから送られてきた回答  
の一例を示しました。これだけの人数の提出課題を確認  
するのは大変な作業ですが、各人の「思考の跡」がみら  
れる文章を読むことはなかなか楽しいものです。